親は、教育行政組織上の部下ではない

当ＨＰにも記載した「宮城県、統合教育推進」に際し、障害児を育てる親の何人かと意見交換した。その話の中で、教頭、校長等から「親が直接『上』の担当者に要望を言わないで欲しい」と云われ、その「上」に直接話をすると非難されたというような話を共通して耳にした。

過去のこうした苦い経験から、今回の折角の親の具体的願い、要望も県教委に届く前に腰砕けに終わるのでないかと案じる。

途中、親の願いを聞き入れて統合教育を積極的に推進すると、色んな派生する問題に責任をもたなくてはならないからと、統合教育に反対する保守的行政マンがいたらアウト。

所詮、組織のこうした人は、単に連絡、伝達するだけで、当事者のために自分の見解で「上」に働きかけようとしない。単なるメッセンジャーボーイ。親が、判断を担う「上」に声を聞いて貰いたくなるのは、当然。

親はその組織の部下でもあるまいし、「『上』にもって行くな」とは決していえないはず。自分たちが親の声を受け止めて動かないで、「上」にもっていったからと親を非難するのは筋違い。何も遠慮することはない。

反対に、本当にその親子の声に共感する教育者なら、親子と共に「上」に会い、共に進言してくれるはず。行政には行政の仕組みの難しさ（特に、予算を伴うもの）も多々あり、直ぐに親の声通りには行かないのも現実。それだけに、親と共に「上」に話す過程の中で、親も組織の仕組みを学び、何を改革することが必要かを理解し、そのために親としてどうした行動が必要かも学んでくれると思う。正に、共有課題に対して共同戦線を張れることになり、県民、市民、住民に喜んでもらえることが少しでも前進・実現していくなら、教育行政を担う人間としての喜びでもあろう。古い言い回しかもしれないが、「公務員は、住民の公僕」なのだから……。

一方、一人や少人数の親では、嫌みを言われたり、非難されたりすると腰砕けになりがちなので、やはり行政相手には、「子たちのために」親たちの発言力の結集が、更にこれからも必要と思う。

一部親のように、誰かが動き何とかしてくれるだろうとの待ちの姿勢では、内容が伴わないものになりがち。内容ある施策にするには、やはり親は、常に、一生その障害状況につき合わざるを得ない子どもの視点からの代弁者であり、社会（教育行政、等々）のチェックマンであるべきと思う。

阿部幸泰　　（2004 年 12 月 21 日）